

ESSAY

エッセイ

クラシックは面白い —その1

面白いと騒ぎが起きる

天才は若死にだとすると「奥様女中」でその名を残すベルゴレージ(1710～1736)はまさに天才でしょう。26歳と2か月しか生きていなかったのです。それでいてオペラ(セーリアもブッフアも)、教会音楽(代表作はスターバト・マーテル)、器楽曲、と傑作を残してくれました。

この「奥様女中」はイタリア(ナポリ)で初演され、その後パリで上演されると面白いと大評判。あまり面白いので、フランスのオペラとその作曲家たちは何をやっているのかと識者たちが騒ぎ始めました。そんなことはない、フランス・オペラは一流の芸術だ、と反対派が息まいて、ここにイタリア派とフランス派が入り乱れて大論争が始まってしまったんです。これが史上有名な「ブッフオン論争」*Querelle des bouffons*というわけですが、なにしろ当時の一流の音楽家、学者、評論家などが総動員で、ガヤガヤ、ワイワイ、ああでもない、こうでもない、と、新聞、雑誌、パンフレット、チラシの類まで使って2年にもわたってお祭騒ぎをやらかしたわけです。イタリア派はジャン・ジャック・ルソーを筆頭に「百科辞典派」と呼ばれる進歩的文化人たちが顔をそろえ、フランス派は70歳になる老巨匠ラモーを担ぎ出して対抗します。

今から見るとバカバカしいような事件でしたが、それというのも23歳のベルゴレージの書いた音楽が生き生きとして活力に富み、人々の胸に単刀直入に訴えるものがあったからでしょう。それは今も変わりありません。その活力はまたキビキビとした脚本と、誇張された滑稽な演技とに支えられています。それはイタリア発祥のコンメディア・デッラルテというテンポの速い喜劇に由来するものですが、特に召使ヴェスポーネの化けたテンペスタ(嵐)大尉のハチャメチャなバントマイムが見ものです。

ところで「奥様女中」は幕間劇(インテルメッツ)と呼ばれますが、実際にセーリアという大型のオペラの各幕の間に上演されたのでそう呼ばれたわけです。肩の凝る劇の息抜きが目的でした。初演のときもベルゴレージ本人のまじめなオペラ(オーペラ・セーリア)「誇り高き囚人」の三つの幕の間に上演されました。つまり、こんな具合でした。セーリア第一幕 — 「奥様女中」の前半 — セーリア第二幕 — 「奥様女中」の後半 — セーリア第三幕。いかがですか。今では考えられません。この面白い幕間劇インテルメッツはのちに独立して喜劇オペラオペラブッフアとなり、ひとり歩きを始めます。

石井 宏(音楽評論家)

1930年、東京生まれ。音楽評論家・作家・翻訳家。東京大学文学部美学科および仏文科を卒業。1993年から1994年までNHK総合テレビの情報番組「ナイトジャーナル」でCD評を担当。モーツァルト評論の第一人者と目され、評論活動のほか、ラジオやテレビの番組でも評判となる。2004年、「反音楽史 さらば、ベートーヴェン」(新潮社)で山本七平賞を受賞。